

ね か ら み の 女



花
登
筐

ぬ
から
みの
女

第三卷



花
登
筐

ぬかるみの女 第三巻

一九八一年三月二五日 第一刷発行

定 価 八八〇円

著 者 花 登 筐

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇〇一

出版部 (〇三) 二三〇一六三六一
電話 販売部 (〇三) 二三八一二七八一

印刷所 凸版印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目次

独立

5

溺れぬために

82

水の宿命

137

ぬかるみとは

198

題簽／著者

裝画／由原木七郎

レイアウト／平昌司

ぬかるみの女

第三卷

独立

1

その一ヶ月の間に支配人の坂井はパーティ用ホステスの為の特別レッスンを行なっていた。

文子の発注したパーティ用の反物は、レッスンでどうか一通りのマナーが身についた頃に売店に並んだのである。

だからその反物に、うわっとダンサー達が飛びついた。

飛びつかざるを得なかったのは坂井支配人が、パーティ用のホステスとしてレッスンを受けた者は店内での和服の着用を許す。但しパーティ用の和服は当店売店の指定のもの以外の着用を禁ず。尚そのパーティ向き

和服は六ヶ月の月賦保証をする」と発表した為である。

売店には二人の店員が居た。一人は事務計算用の事務所に居た女子事務員で、もう一人の販売担当係はあの早苗であった。

あの日、早苗が染久の近くで文子が出て来るのを待っていたのは、やはり同僚を騙したとあっては、今後同じ店で働く以上何かとやりづらいついて考えてのことだろう。

「準子はん、かんにん……あて、あんな小細工をしてしてもて……」

素直に面と向かってあやまられると文子も仕方がなく、

「私はあなたの内職は妨害はしなと言っておいた筈だけれど……」

と皮肉を言うと、

「けど何や仕入先教えたら店用のべも売られてしまうように思えて、つい……」

と猜疑心さいぎしんをはつきり現わしてから、

「何しあんさんはお金持ってはりそうやし、お金持って

はりそんな人には内職しても負けるし……」

とは後から考えた弁解であることは明白であったから、

「そうかしら。あなたは私があんな前金出すなんて思っていないかった筈でしょう。と言って安く仕入れられたら困るし、また売れたら売れたで鞆^{さや}稼ぎ、京都の女性ってなかなか計算高いのには、驚いたわ」

すると一言もなくなった早苗は電車に乗ってから、

「悪いと思ってるけど、子供一人連れて家出て生きて行くと思たら、どんだけつらいことか……」

と訴えた。

「そうかしら……」

「そうです。あんさんなんかそんな苦勞味おうてはいやはらへんやろけど……」

あれだけ金を持っているから文子を独身の未亡人と單純に決めこんだのか、そう告げる早苗に文子は何も言わずに梅田の駅へ着き、改札口から出ると、

「これ今日の紹介料です」

と千円紙幣を一枚取り出した。

「いえ。とても貰えんお金ですきかいに……」

と首を横に振りながらも、もう一度、たつてとすめられれば受取るつもりでいるらしいのがありありと分かったが、

「そう。じゃあ払いせんわ」

と、はつきり告げて早苗を落胆させてから、

「では子供さんにお菓子でも持って帰ってもらいましう」

と近くの売店でキャラメルやビスケット等をセットにして、

「それ四人分ちようだい」

と言うと、

「いえ、あてとこ子供は一人どすけど……」

と怪訝^{けげん}な顔を見せる早苗に、

「あなたのとこは一人、私んとこは三人いるのよ」

と初めて文子は打明けた。

「三人て……子供さんがですか？」

「そうよ。私は三人全部連れて嫁入り先から出て来たのよ。そしてあなたと同じように生れて初めてダンサーに

なったのよ」

「けど準子はんは、そんなかなりのお金を持って出はったんですよ……」

「持って出られる筈がなかったわ。主人が浮氣をして店は倒産するし、土地まで手放してしまったのだから、大阪へ着いた時は一万円もなかったわ」

「信じられません……」

「信じなくても結構だけど、私はとに角三人の子供を育てて来たの。一日に二回の本番についてね……。本当に困ったし、おふとんだって四人で一人分しかなかったわ。でも何とかやってきたのよ。子供達の為に……。だからもし私があなたなら、今日ダンサーをやめて仕事を手伝いなさいと言われたら、無条件で手伝っていたわ。でもあなたは断った……」

「それどこまで収入があるかもわかりませんので。何しあんさんとは初対面同様ですさかい……」

「そうよ。初対面同様よ。でも私は大阪へ来て人に騙されそうになったし、いろんな目を受けて騙す人か騙さない人か、どうにか見分けがついて来た。見分けがつかない

いと生きて行けないからよ。でもあなたはそんな苦勞もしてないようね。つまりそれだけ私より幸福だったのよ……」

「何が幸福なもんどすか。子供のお八つかてろくろく……」

「でもご飯は喰べさせてあげていられるでしょう。お茶碗や箸はあるのでしょうか。私の子供はチャブ台もなく木の箱の上でご飯喰べたのよ！ そんな思いをあなた方は味わったことあるの！」

駅構内を通る人が振り返るほど文子の語氣は強かった。

2

「それそこまでは……」

と言いながらも早苗は、

「けど、あてどこは最低どす。近所の子供さんから見ても……」

「そう。幸福の解釈が違うようね。あなたは自分のお腹

を痛めた子供さんをお舅さんの家へ置いて来ても、その方が子供さんの幸福だと考えている。私は子供達をそんな実家へ置いておけずに連れて出た。母の私がついてないと子供は幸福になれないと思ったからよ」

「そらあんさんには実力がおすきかい」

「ないわ。ダンサーになりたての私は見知らぬ男のお客に、いらっしやいとのお挨拶も出来なかったし、ドレスも一着っ切りで、生れて初めて履いたハイヒールの靴ずれでぼろぼろ泣いたし、もう何度やめようと思ったかも知れない。その時清美さんにこう叱られたわ。そうしないと喰べて行けないなら、より喰べて行けるように考えなさいって。だから誰でも力は同じなのよ。ただあなたは、私は不幸だ子供は可哀想だとばかり思いこんでいて、それでいてぬかるみの中に立っているだけなのよ」

「ぬかるみ？」

「そうよ。水商売の水の中でもダンサーはぬかるみの中で働いているのと同じよ！泥だらけになりながらも何とか汚そうとしないでやるには、せいぜい水のきれいなところを選ばないとならないのよ。それでも足は汚れるけ

ど、子供だけはきれいに育ってくれたらいいのでしょう？ 違ふかしら……」

少し厳し過ぎるかと思つたが、何故か齒痒^{がゆ}さと腹立ちを感じた文子である。

「あなたはね、子供さんの将来の爲と思つて、男の子さんなだけ婚家へ置いて出て自分が水商売に入つたと言つたけど、果たしてそのお子さんの将来は幸福かしら。そんなお姑さんやお姑さんに育てられて素直に育つなんて考えたら大違いよ。『お前の母親は、水商売へ入つたやうな女だよ』と教えこまれたり、歪んだままで育つて行くのよ。それよりは水商売の母の傍で育てても、『お母さんはこうして生きて行く為に水商売に入つたのよ。だからお母さんを早くそんな世界から抜け出せるようにしてね』と子供に言つた方が、子供さんも理解してくれると思うけど、どうかしら？」

初めて早苗が、しょんぼり肩を落した。

「まあいづれにせよ、私の言つた過去が嘘かどうかは店の人にも確かめて、もしその氣になつたら手伝いなさい」

「まだこのあてを……」

これには早苗も驚いたらしかった。

「ええ。但しあなたが居れば仕入れに便利だからなんて思つて、言つてゐるのではないのよ。私が行つた方が、あのご主人だつて安くしてくれそうよ……」

早苗は複雑な顔をした。

「でもあなたも母親、私も母親。あなたの婚家に居る子供さんのこと考えると可哀想でたまらないのよ。だからあなたが引取れるようにしてあげたいの。そこをよく考へて返事をしなさい！」

叩きつけるように言つてから、そのまま早苗と別れたが、文子の腹立たしきは暫くは消えなかった。

自分から意欲を持たず、金や物のみ潤つていれば幸福だと考へているらしい、あの早苗に対してである。

だから本当ならば打っちゃつておいて、将来どんな子供が出来るかを、その眼で確かめてみなさいと言いたかつた文子であつた。

だが、店直営という名目の売店に並べられてある反物を見たら、玄人の早苗ならそれが染久の品物であること

もわかるであらう。

それが判明することに恐れはなかつたが、坂井支配人とのつまらぬ癒着があるかのように取沙汰されるのは避けたい文子であつた。

だからあえて子供の為と強調して機会を与えた文子だが、早苗の方は翌日、

「お手伝いさせて頂きます」

と申し出ていたのは、よほど文子の叱咤しつゐがこたえたのであらうか。

「幾ら収入があれば生活費が出るの？」

「一万四、五千円です」

「何人で？」

「母子二人です」

「じゃあ、月一万円あげるわ。その代り子供さんを引取つて一万円でやつてみなさい」

文子はその一万円を取出すと「これからの一ヶ月分」と渡していた。

早苗は怪訝くわげんそうな顔をして、

「あの……二万円と違いますの？」

「早苗さん。私は一ヶ月七、八千円で三人の子供とやり出したのよ。一万円ありゃ親子三人でやっていけるわ！まずそれからやることね。但しその苦しさが味わえれば後はまた見てあげるわ！」

と譲らなかつた。

3

そんな経緯^{けいゐ}があつて売店の開きとなつたが、商品自体にその利益は加えられず、一反二割の利益だけ計上した。

但しその中から売店の権利金に五分、女子事務員と早苗の給料を払わねばならぬのである。それでも市価の三割安にはなつたし、また見本用の五十点が揃うと坂井支配人は、

「さすがだ。これならここで売っているものと制限をつけても大丈夫。これだけの物を選ぼうとしたら大阪中の百貨店を捜さなければならんだろう」

と賞めてくれたが、早苗は早苗でそこは元玄人、販売

となるとやはり慣れていて、これならばと文子をほっとさせたが、

「お仕立も引受けたいんどすけど……」

と文子に提案した。

そう言えば、洋裁は盛んになつても戦後和裁は陽の目も見ず、着物の仕立は殆どが呉服屋で引受けている時代にもなつていた。

「幾らの仕立賃で、あんたが幾ら手数料を取るの？」

ずばり聞いてやると、早苗は狼狽したが、やはり韃靼^{たてん}ぎをするつもりであつたのであろう。

事実早苗は子供はまだ京都から連れて来ていぬし、文子が居るとは知らずに、

「一万円の月給では殆ど喰べていけんので……」

と若い女事務員にこぼして、

「私は六千円やで」

とあべこべにやり返されているのを文子は目撃していたから、

「じゃあ一反に百円の手数料取るのなら許してあげるわ」

「たったの……」

「それ以外、闇でやったら承知しないわよ」

「わかりました……」

とは残念そうであつたが、暫くすると、

「帯や長襦袢も扱いたいんですけど……」

とまた申し出た。

「支配人さんとの約束は反物だけ、もし扱うんならあなた個人でしなさい」

「ほんとですか！」

早苗は眼を輝かせたが、

「但し反物以外店の保証はないから、月賦分はあなたが立替えるのよ」

と言うとがつくりしたようであつた。

売上げ面から言うと、最初が約百二十反で百万円そこそこの売上げがあり、純益は十万と少し出たが、見本用の五十反分は出資しているので、まだ元は戻っていないかつた。

それでも二ヶ月目からは毎月五十反、六十反とコンスタントに売上げが増えて行つたのは、やっとパーティ用

のホステスの仕事が発覚したからである。

そして出資分がどうにか取戻せた数ヶ月後になると急に売上げが落ちて来た。

それでいてパーティも増えているのにと小首をかしげていると、或る夜、店の洗面所で、

「なあ売店で売ってるパーティ用のきもの、あれより一割安う内緒で手に入るんやて」

とささやく声を文子は耳にした。

文子はその日帳簿を調べたが、仕入帳と売上帳、更に在庫数は合っているし、売上金も間違いはない。もしそれが事実だとすると、早苗が他の染屋に頼んで類似品の反物を染めさせて売っているしか手段がないと、ひそかにヘルプの登美に命じ、文子が喋ったこともない小夜子なるダンサーに早苗と接触させると、翌日その反物が届いたから驚いた。

そしてその反物は、染久のと比べても寸分も違わぬものであつたから、文子も二度びっくりであつた。

文子は昼間、早苗を売店へ呼び、

「これ昨日、あなたが小夜子という人に売った反物だけ

ど、うちの帳簿には載っていないのはどうしてなの？」と問い糺すと早苗は顔色を変えた。

「それにこれは一割も安いわね。あなたはいつからこんなことをしていたの？」

早苗は観念したらしく、

「ちよつとでも値引してくれへんかといろんな人に頼まれましたので……」

「それであんた、この反物どこで染めさせてるの？」

それだけは何としても答えぬ早苗に、

「わかったわ。染久さんで聞いてみるから」

ときめつけると、

「染久さんどす」

と言ったではないか。

「それじゃあ、あの息子さんの方とでも」

「いいえ。準子さんの命令やと、大将の方にあてが取りに行くんです」

早苗は不貞腐れたように白状した。

「じゃあ代金はどうなってるの？」

文子が聞いたのは他でもない。店の保証する六ヶ月間

分は坂井支配人から立替えて文子に渡され、直ちに染久へ支払われているし、染久にはあくまで現金支払いが条件だったからである。

「どうなの！」

文子が鋭く追求すると、

「お金は順番に待ってもろてます」

との返事が返って来た。

「順番に？」

「へえ。あても月賦分が入ったら入金してますし、準子はんも次から次へと支払うてはりますんで順繰りと。けどちよつと遅れても必ず入りますのんで！」

文子は思わず天井を仰いだ。

4

早苗はそんな文子を見て、

「準子はん。ほんまに誓うてあんさんに迷惑はかけません。必ず代金は責任もって支払いますんで信用しとくれやす」

とはどのような神経の持主であらうか――。

さすがに耐え切れなくなった文子が、

「早苗さん。あなたは他人が商売をしている店を利用して儲けていて何とも思わないの？」

と詰問すると、

「けど、給料の安い呉服屋の番頭はなんてどこでもこそこそ自分で儲けてはるし、又それを知ってはつても知らんふりしてはるんが、ええお店の主人と聞いてますけど……」

そうやり返して来たから文子もあきれ返った。

「じゃあ私は悪い主人とでも言うの。あなたは自分が働いている店の商品を、自分で勝手に仕入れ、自分の利益にしているのよ。それが一種の横領行為で犯罪であることを知ってやっていたの？」

「それは正式な店のことですやろ。けど準子はん税務署にも届けてはいはらしませんですやろ。それはもぐりの商売。闇ブローカーと一緒にです。もし公にしやはつたら準子はんかて脱税になりますで」

と今度は威して来たではないか。

「そうかしら。あなたは知らないけど、この売店はこの店の直営で、売上げは一切この店が申告しているのよ。勿論染久さんからも領収書も貰っているし、正規な帳簿に記入されてもいるの。私の貰っている手数料は勿論この店で働いている私の収入として申告もされてるのよ。だから放つておいても当然染久さんの売上げと店の仕入れとは喰い違いが出て来てすべてばれるけど」

本当はそんな手続きは取っては居ないが、そう言つてやると早苗は開き直った。

「ばれたらばれてもしようがおへん。けど手数料と言わはりますけど準子はんがどんだけ儲けてはるか、他のダンサーが聞いたらどんな眼で見ますやろな。あんさんが実はこの店の品物仕入れてはる元のお方やてことは、あても黙っているし誰も知らはらしまへんのやで」

「じゃあ言いなさい。そしたら私は利益を公表するわ。断つておくけど私の利益はまだないのよ」

「準子はん、素人に言うようなことはやめとくれやす」

「じゃあ玄人さんならよく考えなさい。見本の五十反分のお金は誰が支払つての？ 私の利益はね、一反に千

円弱。今日まで五百反以上売れてはいないことはあなたも知っているわね。だとしたら五十万円の見分もまだ出てないのよ。それなのにあなたはこの二、三ヶ月で五、六十反は内緒で売ってるでしょ。としたら確実に五、六万円は純益を上げているわね。どこの店で主人より使用人の方が稼いでいるところがあるの？」

これには早苗も絶句した。

「ね、あなたは単純に私ひとりが儲けている、だから私も儲けたい、それしか頭にならないようにだけど、それじゃ庇^{ひき}を借りて母屋を乗っ取ってるのと同じじゃないかしら？ 私も子供を持つ母親だし、あなたも同じ立場、だからと思つて手伝つてもらおうと思つただけだけど、これじゃあ同情が仇になつて返されたようね」

「そんならあてに辞めと言わはるんですか？」

「辞めるのは当然よ。それから言つておくけど、あなたは聞いているかどうかは知らないけど私は何でもはつきりしなければいかな性分なの。かつてアケミという人が居て私の顔に怪我をさせて、今までの人達は泣き寝入りしたけど、私は警察に訴えることにしたわ……」

早苗はそこで態度が急に一変した。

「ま、まさか、あてを……」

「ええ。とことんやるわ。悪いことをしておいて謝るのならとも角、まだ喰つてかかるような人なら法律で裁いてもらうより仕方がないでしょ」

すると早苗は土下座をした。

「準子はん、このあてには二人の子供が居るんです」

「知ってるわ」

「そんならその子供達はどうなるんです。折角男の子まで引取つたのに……」

「あなたの婚家へ連れて行つて、この子供達の母親は犯罪を犯したので育ててやって下さいと言えはいいでしょう！」

「そんな酷いことを！ やめて！ お願い！ 何でもしますさかい！ そんなことでもして償^{ごな}います！」

早苗は絶叫しながら頼んだが、それが一時的なものであることは文子にもわかつていた。

しかし、文子はその早苗にさせるべきことがまだ残っていた。